

「教育の時代」とマドラサ

日下部達哉

1 南アジアのマドラサ

本稿では、最初にバングラデシュのマドラサ（イスラーム神学校）についての詳述を行い、マドラサと現行教育制度の關係に焦点を当て、南アジアにおける「教育の時代」のなかでマドラサがどのように生き残ろうとしているのかに注目したい。

イスラーム世界においてマドラサ (*madrasa*) という言葉が意味するものの定義はかなり広い。もともとは、イスラーム諸学を学ぶための高等教育施設を意味し、10世紀ごろに、イランのホラーサーン地方で建設され始め、その後、デリー・スルタン朝期のインド、14世紀にはスペインでも建設され [森本 2002]、宗教教育施設としてのマドラサは世界的な広がりをみた。現在も、世界中でマドラサという呼称のついた施設が建設され、そこではイスラーム教育が施されている。そしてその対象とする範囲は非常に幅広く、就学前教育の段階から大学院まで、また、農村部における寺子屋的な小規模なものから、日本の大きな大学のキャンパスと比べても遜色ないほどの敷地をもつものまで存在する。また、地域によってはマクタブ (*maktab*) とよばれる寺子屋式のイスラーム教育もマドラサと呼ぶ場合がある¹。

国によってはマドラサの教育体系を学校教育制度として認定、あるいはアラブ世界のようにマドラサという呼称は、宗教学院のそれではなく、普通教育を施す学校そのものである場合も多い。本論が対象とするバングラデシュでは、小学校から大学院までの学校教育の体系と、イブティディエー (*ibtidayee*) と呼ばれる小学校段階からカミル (*kamil*) と呼ば

れる大学院段階までのマドラサ教育の体系の二元的教育制度を形成している。

イスラーム教育の場であるマドラサでの普通教育実施については、ヘフナーとザマンが、主に南アジアのマドラサが「スクール（学校）」として変貌している様を描いている [Hefner & Zaman]。また、バングラデシュのマドラサについては、社会変化に伴うマドラサの変化を、綿密な調査に基づいて捕捉したフマユンの業績がある [Humayun 2009]。これらは南アジアにおけるマドラサ関連の研究成果であるが、本稿ではこれらの業績に基づいて、本報告全体を特色づけている南アジアの「教育の時代」におけるマドラサのあり方の変化と、政府による教育政策との関連の中でマドラサを考察してみたい。

2 バングラデシュのアリアマドラサとコウミマドラサ

バングラデシュのマドラサはアリアマドラサ (*aliya madrasa*) とコウミマドラサ (*qawmi madrasa*) に分かれており、それぞれが以下に述べる通りの歴史的背景をもつ。

2-1 アリアマドラサの成立背景

南アジアでは1200年代前半、デリーに *Madrasa Firozi* が建てられたのが最初とされているが [Qasmi 2005: 9]、アリアマドラサの嚆矢となったのが、1780年、ベンガル総督ワレン・ヘスティングスによるコルカタ・マドラサの創設である。目的はアラビア語・ペルシャ語学習を施し、植民地政府の下級公務員を養成するためであった [Banglapedia 2007]。1826年からは英語教育も始まった。現地にあった、あるいはそれから建設されたその他のマドラサもコルカタ・マドラサの方式に追随した結果、普通教育も施すイスラーム教育機関として、アリアマドラサが出現した。マドラサの統制については、最初のアリアマドラサであるコルカタ・マドラサの校長を、植民地官僚であるイギリス人が務める形で統制が続いていたが、1947年の印パ分離独立と共に、コルカタからダッカに、教育省のマドラサ教育委員会 (Madrassa Education Board) の一部 (アラビア語部門) が移動してきた。ここで東パキスタンマドラサ教育委員会 (Madrassa Education Board, East Pakistan) によって統括される形となり、バングラデシュとして独立以後も、教育省マドラサ教育委員会によ

て統括されている。

2-2 コウミマドラサの成立背景

ムガル帝国が事実上崩壊にあった1853年、『ウッド教育書簡 (Wood's Education Despatch)』による、パートシャーラーやマクタブなどの、「学校化」がはじめられた。例えば、パートシャーラーのグル (指導者) に対して教育訓練を行い、その訓練が終了したグルがいる場合にのみ運営のための補助金を出す、といったような形をとり、伝統部門を近代部門にシフトさせる形がとられた。この近代教育セクターは、土着の教育施設を、次々と学校教育制度の中に取り込んでいった。その結果、西洋近代教育は、多くのウラマー (イスラーム学者) に対して懐疑的な、西洋化されたムスリムエリートを生み出すこととなった。これにより多くのウラマーたちは、新たに宗教的リーダーシップを発揮する必要性に迫られた [Muhammad 2007]。これを機に1867年、ムハンマド・カシム・ナノウタヴィーらの改革派ウラマーたちによって、体系的なイスラーム教育を施す目的で創設されたのがデーオバンド学院であった。支部や提携を含めた系列校は、年月とともに南アジア全域に及び、現在その数は数千といわれ [ibid.]、このデーオバンド系マドラサは、バングラデシュのコウミマドラサの大きなルーツの一つとなった。デーオバンド系の他にも4派 (バーレヴィー、アウラハディス、ジャマテ・イスラミア、アハマディア) があり、相互連携、あるいは対立関係がある。なかでもデーオバンド系は最大派閥で、アラビア語、ペルシャ語、ウルドゥー語を教授用語とする独自のイスラーム教育を展開する。

現在、アリアマドラサは、教育省マドラサ教育委員会が運営から教育内容まで監督しており、政府から教員給与を支給されるかわりに、ナショナルカリキュラムを担保する時間割となっている。また、アラビア語やハディースなどの宗教科目は、エクストラとなっている。コウミマドラサについては、前述の五派閥それぞれが独自の路線をとりつつ、ダッカにあるコウミマドラサ委員会に属している。コウミマドラサの教育内容は、先の通り、アラビア語、ペルシャ語、ウルドゥー語を教授用語とした独自のイスラーム教育を、独自のカリキュラムに基づいて行っており、主に村人からの寄付や、中東諸国に移住したバングラデシュ人などから

の資金援助で運営されている。2008年に実施したダッカのコウミマドラサ委員会におけるインタビュー調査によれば、委員会でコントロールしているのが5000校、全国で1万校程度あるとされている。

3 バングラデシュ独立後の複線的教育制度とマドラサ

1971年の独立後、バングラデシュ人民共和国憲法第17条では、教育を受ける権利が、「基本的人権の一部」であり、「国の責務」と規定された。政府は、強力な中央集権のもとに小学校の「国立化布告」(1973)、「初等教育法」(1981)など、様々な教育普及政策を打ち出した〔日下部2007: 61-65〕。しかし、今日におけるバングラデシュの制度整備、国民の教育への関心を含む「教育の時代」をつくりあげたのは、1990年、タイのジョムティエンで採択された「万人のための教育(EFA)」世界宣言に呼応した、以下のような教育制度拡充政策である。

- 1990年 義務初等教育法成立
初等教育を基本的人権の一部として無償化。
- 1992年 教育のための食料計画
(Food for Education Program: FFE) 開始
子どもを小学校に一定日数(85%)出席させれば月に十数kgの小麦か米を支給。
最初は実験的に行い、のちに拡大。
- 1994年 女子中学生奨学金計画
(Female Secondary Assistance Project: FSAP)
一定の出席率(75%)と成績水準(45%以上)そして未婚という条件で中学校に通学する女子に奨学金を給付。
- 2002年 教育のための給付金計画(Stipend for Education: SFE) 開始
FFEによる穀物配布に代えて100tk前後の現金とした。

下の表のとおり、これらの教育制度拡充政策によって、バングラデシュ国民の眼前には、短期間に公称で11種類²もの選択肢が提示された。

No.	初等教育機関の種類
1	Government Primary School (GPS)
2	Experimental School (EXP) attached to PTI
3	Registered Non-Government Primary School (RNGPS)
4	Community School (COM)
5	Satellite School (SAT)
6	High School attached Primary Section (H/A PS)
7	Non-registered Non-Government Primary School (NGPS)
8	Kinder Garten (KG)
9	Ebtedayee Madrasa (EM) (アリアマドラサによる初等教育レベル)
10	High Madrasa attached Ebtedayee Madrasa (H/A MAD)
11	NGO-run Full Primary School (NGO)

出所: 2009年初等大衆教育省資料

※コウミマドラサは、1万校程度あるにもかかわらず、この資料のなかには含まれていない。

このような状況の背景には、BRACスクール³などの、NGOによって設立・運営される「学校」を、公的な教育制度に接続させるなど、学校増加に際してNGOの活発な動きがあったことは周知の通りである。しかし、宗教教育部門でも、同様のことが起こっていたことはあまり知られていない。若干のタイムラグはあるものの、アリアマドラサは上記諸政策の対象となり、「学校」の一種として認知されたことによって、増加してきた経緯がある。

この背景には、1982年、エルシャドによる軍人政権発足後、イスラームを国教化し、様々な側面での「イスラーム化」が始まったのち、全国13万のモスク等宗教機関への支援・宗教関係職の増加が図られ、これに端を発するマドラサ開設が増加したことが大きく関わっている。そのうえ1985年、アリアマドラサのアカレディテーション（学位読み替え）が開始され、ダキルという前期中等レベルのマドラサを修了することが前期中等段階のSSC（Secondary School Certificate）と同等とみなされた。さらに1987年にはアリムという後期中等レベルのマドラサを修了することが後期中等段階のHSC（Higher Secondary Certificate）と同等で

あるとみなされ、「マドラサの学校化」が進んだ。農村部では、小学校設立が競争的になっていたが、アリアマドラサ設立は、ある意味でニッチであったため、新たな学校設立を目論む人々が、小学校の競争の中に入るよりは、アリアマドラサ設立を選択するケースも増えた。これにより1970年に1518校であったものが、80-90年代を通じて増加し続け、2000年には7279校となった。政府は、マドラサという教育体系を、公教育のなかに周到に取り込み、就学率向上を図ってきたのである。

一方で、コウミマドラサのカリキュラム編成や試験実施などを司っているコウミマドラサ委員会は、「学校化」を拒み続けた。この理由には、コウミマドラサのほうに、ラマダン期間中の晩に行われる礼拝であるコトメタラビーに必要とされるハフエズの資格保有者が多いことや、シャリーアの裁定に基づく結婚の認定を行うカディ（qadi）など、宗教関係職におけるアドバンテージがあったものと思われるが、近年の法改正によって、「カディのポストに就くためには、マドラサアリム、またはアリム相当の修了証を持つことが必要である」ことになった〔フマユン 2009: 8-9〕。もともとカディの職は、政府によって割り当てられ、指定されるものであることから、コウミマドラサ修了生のプレースメントは悪くなってきている。これに対しコウミマドラサ側からは、カディのポストをアリアマドラサ修了生に限るべきではなく、就業機会の均等を保つべきであるという異論が起こった〔ibid.〕。

こうしたコンフリクトが表面化する一方で、政府とコウミマドラサ委員会の間には、1980年代半ばから、今日に至るまでアクレディテーションの交渉過程が存在する。交渉は、教育内容にあまりの開きがあるため難航しているが、政府が普通教育完全担保を求める一方、マドラサはできるだけ独自の部分を残して学位の読み替えと、教員給与の支給を求めている。2009年の交渉において、政府が「コウミマドラサ委員会の存在を認める」という歩み寄りを行い、暗礁に乗り上げていた交渉は緒についたかに見えるが、コウミマドラサ内部でも、賛否が分かれている。こうしてみると、コウミマドラサの旗色はあまりよくないが、実はコウミマドラサも、地域によっては生徒数が増加しているようである。コウミマドラサ増加のメカニズムは、受け手である人々の側から見ていく必要があるだろう。

4 人々からみたマドラサ

これまでみたように、バングラデシュの初等教育レベルにおいては、小学校、NGO系学校、アリアマドラサ、コウミマドラサなど、多種多様な選択肢が現れた。では、教育政策の受け手である人々の側から見れば、マドラサとはどのような存在なのだろうか。

バングラデシュの近郊農村などでは、近隣の産業経済圏が、一定の学歴を身に付けた労働力を求めていることもあって、HSCレベルまでのカレッジ（日本の高校に相当）が、多く設立されるようになってきている。うまくすれば村内でHSCを取得し、村で「ぶらぶら」していたとしても、大都市と実家を往来しながら仕事を求めていくことも可能になってきている。しかし、僻地農村ではまだ、SSCレベルの中学校すら設立されていないところも多い。この場合、村外に中等教育を求めることになっていくが、寄宿舎費用や、実家と学校の往復交通費などのことを考えると、よほど成績が良く、無理をしてでも行かせたいという場合以外は、一部の富裕層しか、村外に子どもを就学させられない。

しかし、マドラサ、ことにコウミマドラサは、初等教育レベルから高等教育レベルまで、無償あるいはわずかな授業料で通うことができるし、寄宿舎付きのコウミマドラサだと、送り出した世帯にとっても経済的に有利となる。また、地域によっては居候兼宗教の家庭教師などの仕事も行う場合があって、そうした地域ではマドラサ進学は、合理的な選択だといえるだろう。また、マドラサによってはアリアマドラサとして登録、運営しつつも、コウミマドラサを校庭に建設し、所属教員はどちらでも教えるという方法で運営効率を上げているマドラサもある。また、普通学校に通いながらコウミマドラサに通う、中には一旦、高等教育の学位をとってから改めてコウミマドラサに通うケースもあり、農村住民のあらゆる場面で教育や学校、そしてマドラサが浸透・機能しはじめている。

付記・本研究は、日本学術振興会平成 21-22 年度科学研究費補助金（研究活動スタート支援）の交付を受けて行った研究の成果である。

註

- ¹ ここでは、寺子屋的なマクタブの類は周辺の取り扱いとしている。基本的には初等教育レベルから高等教育レベルまでのイスラーム教育体系を有し、独自の修了証を発行する教育施設のこと、あるいは、イスラーム教育のみならず一般教科をも施し得る教育課程を有し、課程修了後には、公教育における修了証に読み替えが可能な学位・修了証を授ける教育施設のことをマドラサという概念の中心に据えたい。
- ² 公称では11種類といわれているが、これにコウミマドラサと呼ばれる独立採算制のマドラサを足すと12種類、運営の組み合わせで13種類の教育機関が出現したことになる。
- ³ 世界最大のNGOともいわれるBRAC（バングラデシュ農村向上委員会）は、ノンフォーマル初等教育事業として、BRAC スクールを1985年から展開した。BRAC スクールは竹やジュートの壁で、トタン屋根の簡易な校舎で、貧困世帯の子どもを中心に30名程度が学ぶ小規模な学校である。しかし教員、教材、カリキュラムの質は高いといわれており、2007年には3万2000校、98万人が学ぶまでになっている。

参考文献

- 森本一夫、2002、「マドラサ」、大塚和夫他（編）『岩波イスラーム辞典』、岩波書店、921-922頁。
- 日下部達哉、2007、『バングラデシュ農村の初等教育制度受容』、東信堂。
- フマユン・コビル、日下部達哉（訳）、2009、「バングラデシュ都市部マドラサの事例研究—その増加と周縁化—」、『ワセダアジアレビュー』、6、6-10頁。
- BANGLAPEDIA, http://banglapedia.search.com.bd/HT/M_0032.htm, 12.06.2007.
- Kabir, MD. Humayun., 2009, *Madrasa Education and the Contesting Muslim Identity in Bangladesh: Aspects of Social and Religious Change*, Doctoral Dissertation, IDEC, Hiroshima University.
- Muhammad, Qasim. Zaman., 2007, "Tradition and Authority in Deobandi Madrasas of South Asia" in Robert W. Hefner and Muhammad Qasim Zaman, *Schooling Islam- The Culture and Politics of Modern Muslim Education*, UK: Princeton University Press, pp. 63-65.
- Qasmi, Muhammadullar Khalili, 2005, *Madrasa Education: Its Strength and Weakness*, New Delhi: MMERC in association with MANAK, p. 9.

くさかべ たつや ● 広島大学教育開発国際協力研究センター